10 月 31 日のメッセージ

聖書：創世記　4：　1－10

「どうして」

神がこの世界を創られた時、それは極めて良いものでした(「神はお造りになったすべてのものを御覧になった。見よ、それは極めて良かった。」創世記 1:31)。全てのものは神の思いの内にあり、神の思いに応えて生きていました。人間も当然、その関係の中に置かれていました。互いに助け合う者として生かされていたはずでした。

人間が神に背くのは外的な要因(例えば蛇の誘惑)ではありません。人の内にある欲望が神の思いから離れさせるのです(「更に、次のように言われた。『人から出て来るものこそ、人を汚す。』」マルコによる福音書 7:20)。人間は自分の意思で、神から離れる道を選んだのです。隣人と助け合う道ではなく、隣人を蹴落として自分だけ良ければ良いという道を選んだのです。

もちろん、どのような道を歩んでいても、神が共におられるという事実は変わりません。だから、しっかりと神を見つめ、神の思いに聞こうとしているならば、たとえどのような状況に置かれようとも心は揺り動かされないはずです。

「主はカインに言われた。『どうして怒るのか。どうして顔を伏せるのか。もしお前が正しいのなら、顔を上げられるはずではないか。正しくないなら、罪は戸口で待ち伏せており、お前を求める。お前はそれを支配せねばならない。』」(創世記 4:6-7)

カインに対する「どうして怒るのか」(創世記 4:6)との声は、自分をしっかり保てとの神の呼びかけです。自分中心ではなく、神中心の生き方を選べとの呼びかけでもあります。しかし、人間は、頭ではわかっていながらこの声に応えることができません。神の正しさではなく自分の正しさを中心にしてしまいます。それこそが、神の前から離れることだとわかっていながら、どうしても自分の欲望に揺り動かされてしまうのです(「罪は戸口で待ち伏せており、お前を求める」創世記 4:7)。

私たちの人生は大なり小なりこの繰り返しです。神は、そのような弱さを抱える私たちを一人も見捨てることなく、いつも招き続けてくださっています。繰り返しから抜け出すには、神の呼びかけに応えていくしかありません。

呼びかけに応えて、まず自分と向き合い、背きを自覚する(「あなたに背いたことをわたしは知っています。わたしの罪は常にわたしの前に置かれています。」詩編 51:5)。

赦しを求める(「神よ、わたしを憐れんでください／御慈しみをもって。深い御憐れみをもって／背きの罪をぬぐってください。」詩編 51:3)。

そして、赦された者として、愛を実践していく(「子たちよ、言葉や口先だけではなく、行いをもって誠実に愛し合おう。」ヨハネの手紙一 3:18)しかありません。

最初から完全に行うことは無理でしょう。不完全なままで良いのです。とにかく一歩踏み出すことから始めましょう。